

3 ま と め

以上の結果、モミガラクンタン養液栽培実施の場合、①ノルチッソ区は総収量においては土耕区より約17%の減収となったが、今年の結果をみると早期収量が多かったことを考えると、ハウス連作障害防止面からも

一つの栽培法ではなかろうかと思われる。なお、液肥の種類については肥料代の安い①ノルチッソ区が有望と考えられる。①ノルチッソ主体の液肥価格については10アール当り昭和49年の価格で25,000~30,000円前後要するようである。

夏秋キュウリのは種期別整枝法試験

大友 詔次郎

(福島県園芸試験場)

1 ま え が き

福島県の夏秋キュウリの出荷は従来は8、9月に集中し一時的に供給過剰の傾向にあるので6~7月から出荷する前進栽培がふえつつある。本試験では、は種期別に品種、栽植距離、整枝の3条件を組合せ総合的な比較、検討を行ない作季幅拡大のための資料を得ようとした。

2 試 験 方 法

試験Ⅰ 1971年には種期別の品種比較を行なうために新光節成10号(主枝側枝型)と新光A号(側枝型)

を5月10日、6月10日、7月10日には種した。試験規模は1区をそれぞれ11.25m²(10株)、2連制とした。施肥量はN-45、P₂O₅-35、K₂O-45kg/10a、栽植様式は合掌型パイプ支柱を用い、畦幅3m(2条)、株間75cmとした。5月10日は種のみ7月5日まで黒ポリマルチとした。整枝は主枝に発生した側枝の下位5節は除去し、6節以上の側枝は摘心せず放任とした。

試験Ⅱ 1972年に早まきとおそまきについて2品種(新光節成10号、新光A号)を用い効果的と考えられる栽植距離と整枝法を設定して比較検討した。ただし6月まきはすでに検討済み(福島園試1965~68)のため省略した。試験区は第1表に示した。

第1表 試験Ⅱの試験区

試 験 区	は 種 日	品 種	株 間 cm	整 枝
5, 10, 10号-60整	5月10日	新光節成10号	60	整枝*
5, 10, 10号-30整	"	"	30	"
5, 10, 10号-30放	"	"	"	放任**
5, 10, A号-60整	"	新光A号	60	整枝
5, 10, A号-30整	"	"	30	"
7, 10, 10号	7月10日	新光節成10号	"	放任
7, 10, A号	"	新光A号	"	"

注.* 主枝1本仕立とし、主枝の下位4節は分枝を除去し、5節以上の分枝は2節で摘心し、2次以上の分枝も同様に摘心した。摘心は8月3日まで行なった。

** 主枝の下位4節は分枝を除去した。5節以上は摘心を行わず伸長させた。

試験規模は1区9.0㎡, 2連制とした。耕種概要はほぼ試験Ⅰと同様である。

試験Ⅲ 1965~68年の当場の試験および本試験の試験Ⅰ, Ⅱにおいて普通まき(6月10日まき)およびおそまき(7月10日まき)については検討が行なわれある程度結論が得られたので, 1973年には早まきに限定して品種および株間, 整枝法の検討を行なった。試験区は第2表に示したとおりで, 試験規模は1区9.0㎡, 2連制とした。耕種概要は試験Ⅰとほぼ同様である。

第2表 試験Ⅲの試験区

試験区	品種	株間	整枝
10号-45整	新光節成10号	45 ^{cm}	整枝*
10号-45放	"	"	放任**
10号-30整	"	30	整枝
10号-30放	"	"	放任
A号	新光A号	"	整枝

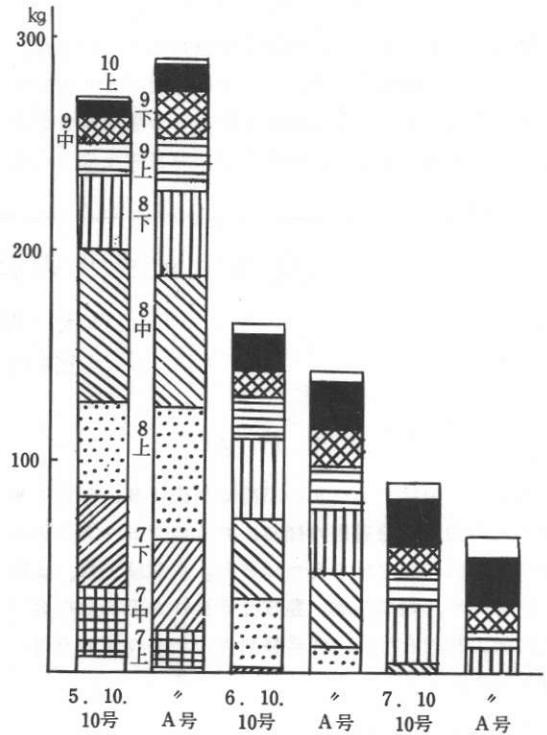
注. *, ** 整枝, 放任の方法は試験Ⅱと同様。

3 試験結果

試験Ⅰ 生育および収量調査結果は第3表, 第1図に示したとおりである。

第3表 試験Ⅰの生育調査
(10月13日 5株平均)

試験区	枝数	枝長
5.10 新光節成10号	14 ^本	19.7 ^m
" 新光A号	48	67.3
6.10 新光節成10号	17	22.1
" 新光A号	43	43.9
6.10 新光節成10号	15	16.3
" 新光A号	36	35.2



第1図 試験Ⅰの収量調査
(2区計20株あたりくず果を除く)

生育は各は種期とも新光A号は分枝数, 伸長量が多かった。収量は5月10日まきは総収量は両品種ともほぼ同程度で, 時期別では新光節成10号は初~中期, 新光A号は中~後期の収量が多かった。6月10日まきは, 総収量は新光節成10号が多く, 時期別では5月10日まきと同様な傾向であった。7月10日まきでも総収量, 時期別収量ともに6月10日まきと同様な傾向であった。

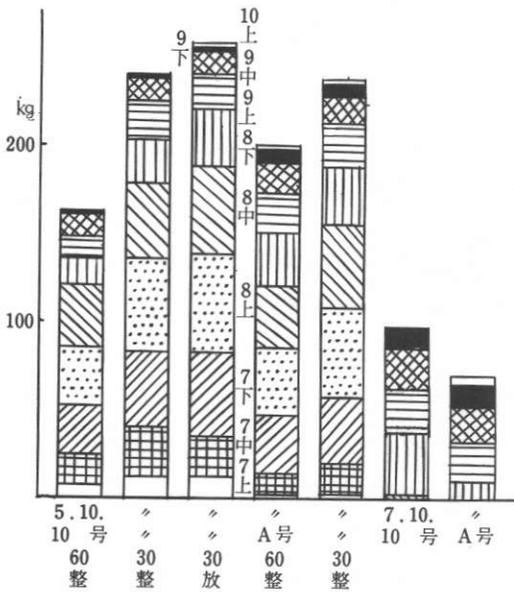
試験Ⅱ 生育, 収量調査結果は第4表, 第2図に示したとおりである。生育は5月10日まきでは新光A号は新光節成10号に比べて分枝数, 伸長量とも多かった。新光節成10号の中では株間30cm整枝法放任区(30cm放任区と略す)は分枝数は少ないが, 伸長量は多かった。7月10日まきでは新光A号は分枝数, 伸長量ともに多かった。収量は5月10日まきでは新光節成10号-30cm放任区, 同一30cm整枝区, 新光A号-30cm整枝区は総

収量が多く、前の2区は初～中期に、後の区は後期収量が多かった。7月10日まきでは新光節成10号が総収量多く、初～中期に多かった。

第4表 試験Ⅱの生育調査

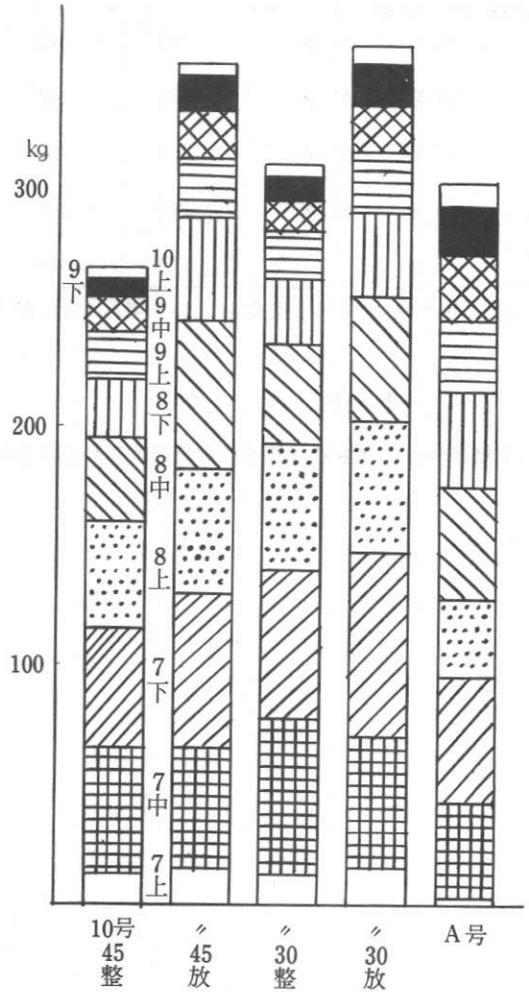
試験区	枝数	枝長
5, 10, 10号-60整	194	71 m
" " -30整	328	144
" " -30放	170	243
" A号-60整	596	324
" " -30放	748	484
7, 10, 10号	264	266
" A号	380	449

注. 2区10株調査し、9.0 m²あたりに換算



第2図 試験Ⅱの収量調査

(2区計18m²あたりくず果を除く)



第3図 試験Ⅲの収量調査

(2区計27.0m²あたりくず果を除く)

生育は新光A号は新光節成10号よりも分枝数、伸長量ともに多かった。新光節成10号の整枝区は分枝数は多いが伸長量は少なく、逆に放任区は分枝数は少ないが伸長量はやや多かった。収量は新光A号は新光節成10号に比べて総収量はやや少なく曲り果がやや多く、時期別では後期に多かった。新光節成10号の中では、30cm放任区、45cm放任区は総収量が多く、前区は初～中期、後区は中期に多かった。

試験Ⅲ 生育および収量調査結果は第5表、第3図に示したとおりである。

第 5 表 試験Ⅲの生育調査

試 験 区	枝 数	枝 長
10 号 - 45 整	600 ^本	172 ^m
10 号 - 45 放	350	345
10 号 - 30 整	504	204
10 号 - 30 放	285	310
A 号	1,077	905

注. 10月16日 1区5株調査し 13.5 m²あたりに換算

4 ま と め

品種については主枝側枝型の新光節成10号と側枝型

の新光 A 号の 2 品種を供試して各は種期別の適応性を検討した結果, 5月10日まきは新光節成10号, 新光 A 号ともに適応性があり, 前者は早期収量が多かった。6月10日まきについても同様な結果を得た。7月10日まきについては新光節成10号が多収でありまさっていた。株間および整枝法については5月10日および7月10日まきについて検討を行なった。5月10日まきでは, 新光節成10号は45cm程度の株間で整枝法は放任, 新光 A 号は同じく株間は30cm程度で整枝法は7月末まで摘心を行なうのがよいと考えられる。7月10日まきでは品種は新光節成10号を用い, 株間および整枝法は早まきと同様に30cm, 放任がよいと考えられる。